

白鳳時代の浄土教美術について

石 崎 達 二

一 山田殿像（重文） 東京国立博物館法隆寺宝物館四十八体仏14号金銅弥陀三尊像（台座の山田殿の銘から山田殿像という）は、裳懸式の方形台座に倚坐する中尊と、その踏分蓮花座横から左右に分枝した二蓮莖上の蓮花座に、頭冠に弥陀化仏をもつ観音と、宝瓶をもつ勢至を脇侍とした三尊像で、今日知られる限りでは金銅仏として世界最古の弥陀像である。この山田殿像は新羅式の造像であるから持統三年紀（六八九）に見える天武天皇の奉為に新羅から献納された金銅弥陀三尊像とも推測されるが、山田殿から大化改新の功臣でのち不幸な最後をとげた蘇我倉山田石川麿の山田寺（法王帝説裏書に見える浄土寺）の仏像だったのではなからうかと推測されている。本像が紀に見える新羅所献の弥陀像でなかつたとしても、その形式が新羅式であるところから持統紀の弥陀像と同一視することは不当でない。当時新羅で無量寿経の註釈が作られ、わが国でも天平時代にそれが書写されたのであるが今は伝わっていない。無量寿経については、聖徳太子が中国に派遣さ

れた惠隠が三十一年にわたる留学の後、販途新羅で研鑽を重ね、販朝して無量寿経を講讀し（六四〇）その十二年後恰も仏教公伝百年に当る六五二年に重ねて無量寿経を講讀し宮講の始とされたことは紀の所載によって明かである。かくて本像は新羅の浄土教がわが国に伝えられた史実を立証する。

二 善光寺如来形像（重文） 四十八体仏143号弥陀三尊立像は所謂善光寺如来形の最古の弥陀像であるが、三尊座下の部分に後補があり、いまそこに蓮莖分枝式の形跡は認められないが、その舟型光背には蓮莖分枝式蓮座の七化仏がある。

三 四十八体仏中の弥陀と脇侍（重文） 四十八体仏185号の頭冠化仏の観音と勢至像は、対照的な造形から中尊と共に弥陀三尊であつたことは明らかである。いまその中尊を佚しているが、両像座下の花形は蓮莖分枝式の形を示している。いま試みに四十八体仏中脇侍のない148号仏形倚像をこの二脇侍の中尊と仮定すると、この三尊はまさしく弥陀三尊として一具を形成していることが知られる。即ち倚像の左足下に柄（ま）

が残っているから、ここに元來踏分蓮座があり、その下面の柄穴（せき）にこの柄が入り固定するようになっていたことが推定される。よつて本像兩足下に踏分蓮座を想定すると、山田殿像の踏分蓮座と全く同じ形となり、本像が弥陀であることが確認される。この三尊は初唐式の最も豊麗な弥陀三尊である。

このように考えると倚像として有名な東京深大寺釈迦像（重文）も弥陀像と推考することができ、ほかに四十八体仏の独尊仏形像十軀中に三軀の弥陀像を推定し得る。就中153号像は裳懸方台に立つ稀有の立像であるが、179188号像を脇侍とする弥陀像と推定され、三尊共に衣端に複連点文を鑄出している。この外四十八体仏中頭冠に化仏のある観音像は十九体あり、また右の185号観音像は兵庫県加古川鶴林寺の金銅観音像（重文）と全く同じ形式であるから、何れも本尊弥陀を想定することができるが、その存否は不明である。

なおこの種蓮茎分枝式蓮座をもつ弥陀三尊としては京都地蔵院蔵の金銅三尊（重文）があるが勢至を供している。

四 押出仏（重文） 東京国立博物館法隆寺宝物館には十具の押出仏があり、頭冠化仏の観音を脇侍とする弥陀三尊では202204205（表）、同五尊では198199200201号の六具をあげることができ、その中蓮茎分枝を明示しているのは204205だけであるが、他の押出仏は蓮座の下で打切られているから蓮茎分枝は見られない。就中201号は往生者をあらわしており、五通菩薩

といわれた浄土変を想わせるが本尊は説法印であり、他の押出仏の中尊は何れも転法輪印である。

これは法隆寺金堂西大壁弥陀と同じ形であるから、これらは何れも右壁画と同じく弥陀浄土変の本尊をあらわすものといふべく、上記弥陀像も亦かかる浄土変を背景とした造像であることを推知することができる。この外同種の押出仏・尊仏は法隆寺・知恩院等に伝えられている。なお独尊の弥陀金銅像としては柳孝氏蔵転法輪印弥陀座像、大分県杵原八幡宮の説法印弥陀立像（重文）等をあげることができる。

五 長谷寺銅板法華説相図浄土変（国宝） 法華経見宝塔品を図示した長谷寺法華説相図の四仏浄土の中、下方の二浄土は全く同形で、釈迦・弥陀両浄土変と推定される。この両浄土変は中尊と六脇侍からなる七尊形であるが、中尊裳懸座下から出る蓮茎分枝式蓮座に六尊をあらわしている。これは蓮茎分枝式蓮座の典型的な形といふことができ、この説相図銅板の造られた六八六年若しくは六九八年（銘による）頃、釈迦・弥陀浄土が全く同じ形で表現されたことを実証する。

六 橘夫人念持仏厨子（国宝） 法隆寺資財帳に金漚銅像と記された宮殿像一具で、さざ波よする宝池（水盤）から生え出た蓮茎分枝式三蓮座に弥陀三尊をあらわし、光屏にはその三尊の蓮茎から分枝した小蓮茎の蓮座に、弥陀の説法を聴いて歓喜のあまり白布を翻して踊る形の往生者と化仏を薄肉彫

している。厨子四辺の扉には二天・二王・四天王・二僧形の外仏形二、菩薩形六を描き、下部須弥座には西域風の暈染ぼかしや隈取くまどりの手法を用いて往生人が描かれている。これらの中、化仏・諸天を除くと、光屏と各部の諸尊は仏形二、菩薩形六、往生人十一となるから、仏形二を弥陀とすれば菩薩形四はその脇侍と見られ、残りの二は厨子中尊の両脇侍を重ねて描き僧形二と共に五尊の形としたとすることができる。即ち本厨子は弥陀浄土を立体化した壮大無比の浄土変を具象するものであるが、銅造弥陀三尊一具と画像弥陀三尊二具合せて三具を表出しているのである。これを無量寿経の三輩に配すると、法隆寺東院伝法堂弥陀三尊三具の乾漆像（天平末）の先駆とすることができよう。本厨子はその光屏の往生人の姿から恐らく新羅の造作と考えられ、銅造三尊は初唐式の影響を受けた新羅仏と推定される。なお法隆寺資財帳によると、天平五年（七三三）光明皇后がこの阿弥陀像に褥菴床・宝頂器具を寄進されている。この年皇后の母橘夫人三千代が逝去されたから、皇后は特にこの弥陀像にこれらを寄進して永く悲母の忌齋を修せしめられたと推定される。後世本厨子を橘夫人念持仏厨子とよばれた所以はここにある。

七 法隆寺金堂西大壁弥陀浄土変 法隆寺金堂四大壁には釈迦・弥陀・弥勒・薬師の四仏浄土変が描かれているが、弥陀を除く三浄土変は悉く十三仏構成で弥陀浄土だけ蓮茎分枝式

蓮座に弥陀三尊と二十五往生人を描き二十八尊の構成となっている。再現図によると二十五往生人の中最小の一人が中尊蓮座下の蓮茎に描かれ新生菩薩とされる。これは敦煌千仏洞332号洞の弥陀浄土変と同じで、敦煌では四十九の往生者を描き、中尊座下の蓮茎は宝池中に隠没して見えない。かくの如く法隆寺弥陀浄土変は新生菩薩を除き二十四の往生者を描き、敦煌では新生菩薩を除き、四十八往生者を描くのは、二十四願経といわれる大阿弥陀経・平等覚経等の初期無量寿経によつた浄土変が法隆寺壁画であり、敦煌壁画は四十八願経といわれる後期無量寿経によつたからで、この往生者は本願の数を具象するものであると知られるから、かかる弥陀浄土変は無量寿経による本願様弥陀浄土変とよぶべきである。

八 平等一根 かかる弥陀浄土変の原型はガンダーラの舍衛城神変像（三世紀ラホール博物館）サルナートの同様像（五世紀サルナート博物館）に見られる。これは千釈迦示現といわれる釈尊の大菩提心の発露を劇的に表象した奇蹟像で転法輪印の中尊が大蓮茎上の蓮花座にあらわされている。これが仏像の蓮座の始めと考えられるが、わが国の智光は、この大蓮茎を根と見て、平等一根といい、釈尊の大菩提心を弥陀の本願として信根と転釈している。この信根即ち本願を蓮茎分枝としてあらわし三尊と共に往生人を俱会一処に具象したのが弥陀浄土変であることが知られるのである。（註省略）